本資料の著作権は江戸川カタック社に帰属します。無断での複製・転載・配布・引用・改変・転用を固く禁じます。© 江戸川カタック社（主宰：林広貴）

中級Ⅱ　学藝神サラスワティー

理論篇では輪廻、業、法、解脱というインド思想の核となる概念の整理をします。
その上で、クリシュナやシヴァといった「人格神」とはなんのかを考えます。

実践篇のヌリッタ篇は、ラディに加えて、ウタン、タート、パランなどさまざまな演目を学びます。
可能ならマッディヤ・ラヤでぜんぶ繋げてやってみましょう。

ヌリティヤはサラスワティー・ヴァンダナを学びます。ビルジュ・マハラジの作曲・振付でとても美しいものです。
サラスワティーは学藝の神です。学と藝の両面における充実を祈りましょう。

神話篇では、上記ヴァンダナの主題であるサラスワティと、その仏教形態である弁才天について学びます。

輪廻（サンサーラ）と業（カルマ）

ひとは死んだらどうなるか。キリスト教やイスラーム教では、「復活の日」に蘇って「最後の審判」を受けると考える。だから土葬する。

日本人はおおらかで、死者はどこか近くの山や海にいるのではないか、というように考えるのが、最古層の考えである。
同時に、仏教の輪廻思想が根づいていて、前世や来世をうんぬんすることもある。さまざまな「転生もの」を量産しつづけ、「人生何週目だ」といった語法も普及している。
まったく矛盾しているが、そこを突き詰めて考えないのが日本風である。

インド思想の根本に「輪廻（サンサーラ）」がある。
死んだら再生してまたこの世に生まれ出で、それが永遠に繰り返されるという考えだ。

この世でどんな生を送るのか、来世は何に生まれ変わるのか。それを決定するのが業である。業は「行為」を意味するサンスクリット、「カルマ」の漢訳語である。
生きるとは行為することだ。食べること、歩くこと、考えること、思うこと、ほどこすこと、殺すこと。
すべてが行為である。業＝行為（カルマ）によって、来世が決定される。逆からいえば今世は前世の業によって決定されている。

善い行いは幸福な生をもたらし、悪い行いは苦しい生をもたらす。因果応報、自業自得。

法（ダルマ）

この世界はどうなっているのかをひとは知りたいと思う。輪廻と業は世界のありかたを説明する概念である。

では、そのように世界があるとして、人間はいかに生きるべきか。いかに行為すべきか。
男はどうあるべきか、女はどうあるべきか、バラモンはなにをすべきか、シュードラはなにをすべきか、政治家はなにをすべきか、商人はなにをすべきか。
そのような規範が欲しい。規範に従って生きることがよい行為（カルマ）である。そのような生きかたが出来れば、今世は充実するであろうし、来世はもっとよくなるだろう。

輪廻や業といった世界ぜんぶを貫く仕組み、そして実際の人生をどう生きるべきかという規範の集積を包括する根源的な秩序のことを「法（ダルマ）」という。

ダルマの原義は「保つ」「支持する」という意味。ダルマは文脈によって「宗教」を意味し、特にヒンドゥー教ではダルマといったらヒンドゥー教を指す。
仏教ではブッダの教え、解脱に導く真理のことをダルマといったりする。

ダルマは法と訳されるが、言うまでもなく代議士が議論して決めた「法律」とはぜんぜん異なるものである。人定法はひとが覆すことができる。
ダルマは人定法を内包する、より大きな概念である。宇宙を貫く根本の理法であり、王も領主も人民もこれに従うべきものである。

解脱（モークシャ、またムクティとも）

輪廻をどの程度信じるのか、現世をどう見るかはひとそれぞれである。物質的な死により意識が消滅し、それで終わりだと考えてもよい（唯物論）。
日常生活では可能な限りダルマに従い、祭祀はバラモンの言うとおりにし、人生を楽しむもよい。

では例えば生来の気質から、あるいはなにかのきっかけで、永遠の輪廻から抜け出したいという思いがきざしたらどうだろう。
輪廻からの脱却を解脱という。代表的な解脱の方法としてか以下のふたつを紹介する。

１、梵我一如
これは古代インドの哲学的経典である『ウパニシャッド』が説く思想である。
個を成立させている中心原理である我（アートマン）が宇宙の究極的実在である梵（ブラフマン）と本質的に同一であるという認識を通じて、輪廻からの解放を目指す。
宇宙と自己が根本的に一つであると悟れば、死も輪廻もないはずである。

２、縁起説、悟り
ブッダが説いた仏教の立場である。この世の一切は苦であり、現象世界は無常なる因果の糸で編まれたものであり、不変なる我なるものは存在しない。
世界が原因と結果の連鎖によって生じているとすれば、この網の目を細緻に分析し逆に辿っていけば、輪廻から脱出できるであろう。
ガウタマは瞑想の末にあらゆる苦悩の究極的な原因が「無知」であると観じた。無知（縁）からさまざま活動と苦悩が生じている（起）。
そのように悟るなら、無知を滅し、業は消滅し、輪廻から離れることができるだろう。

人格神について

上に輪廻、業、法、解脱というインド思想全体をつらぬく基礎概念について説明しました。これが基本的な世界観です。
では、こうした概念とクリシュナやシヴァやガネーシャといったインドの神々、
お祭りで崇めたり、家具の上の置物であったりする神様はどういう関係にあるのでしょう。

位相が異なるのだと理解しましょう。言い換えれば「抽象度」が違うのです。

輪廻や法というのは抽象的な思惟の世界です。それは確かに存在していますが、概念でしか把握することが出来ません。
その反対にあるのが生の現実の世界です。五感で把握できる世界と言ってもいいでしょう。
その間にあるのが人格神の世界です。人間は五感だけで世界を把握しているのではない。大脳が発達したヒトは言語で世界を把握している。

すなわち概念の世界を生きている。五感の世界と概念の世界を、人間は同時に生きている。
そこで人間は五感で感じられる事物を抽象化したり、逆に概念としてしか存在しないものを具象化したりする。
それが人格神の世界です。　海の神、川の神、天候の神といったら前者です。破壊の神、創造の神、吉祥の神といったら後者です。

抽象的思惟の世界＝哲学
人格神の世界＝神話
五感の世界＝生の現実

世界人類どの文化でもこれら位相が存在します。その現れ方の違いに個性が出るのです。
周知のとおりインド人は抽象的思惟にすぐれ、数学や哲学の領域で人類におおきな貢献をしています。
日本人は反対に抽象概念の操作が苦手ですが、半径５メートルの把握力には抜群の力を発揮します。

舞踊は身体の藝術です。身体そのものは「生の現実」の位相でしかありません。
が、その身体の表現が「神話」や「哲学」の位相と同時に存在していること、常に意識するようにしましょう。

ラディ／Ladi／लड़ी

1

Takiट Takiट **Taka** Takiट Takiट **Gina** ×4

Takiट **Taka** Takiट Takiट Takiट **Gina** ×4

Taka Takiट Takiट **Gina** Takiट Takiट ×4

Takiट Takiट Takiट Takiट Taka Taka
Takiट Takiट Takiट Takiट Gina Gina ×2

Takiट Takiट **Taka** Takiट Takiट **Gina** ×4

Tihai1

Takiट Takiट Taka Taka Gina Gina
Takiट Takiट Taka Gina Taka Gina ×3
Thaa na Thaa na Thaa

2avartan → Tihai 2

Takiट Takiट Takiट Takiट Tha
Takiट Takiट Takiट Takiट Tha
Takiट Takiट Takiट Takiट Tha Dhin Tha Dhin ×3
Tha

2 （Ginti）

1 2 3 4 5 12345 ×4
1 2 3 4 12345 1 2 3 4 1234 12345 ×4
1 2 3 12345 1 2 3 12345 gap 12345 ×4
1 2 12345 1 2 12345 12 1234 12345 ×4
1 12345 12345 12345 12345 ×4

↓ Tihai
1 1234 1 1234
12345 12345
1234 5~4~3~2~1 1matra Gap

ウターン（Uthaan／उठान）&タート（Thaat／थाट）　in Madhya Laya

タートは多くの場合、舞台の冒頭で示される演目です。非常にゆったりとしたテンポの中で、からだの線や気品を見せます。
眉・目・首・手首・胴といった細部を繊細に動かすのが特徴です。舞台全体の雰囲気を整える導入としての役割があります。

その後に置かれる ウターンは、後続のリズム指向の演目を開始する合図のような存在です。軽快かつ機敏なリズム構成で進み、最終的にサムに強いアクセントを置いて終わります。
これは「立ち上がり」「出発」を意味し、タートの静的な美から、より複雑なトゥクラ（Tukra）やパラン（Paran）などの演目へ道筋をつけます。

以下はキタキ先生の手になる作品で、「ウタン＆タート」を３ブロックおこない、最後はティハイで締めます。
タートの振りにところどころにガネーシャの意匠が入ります。ガネーシャのタートです。

1

Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha	Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha
Dha Tin Tin Ta　Ta Dhin Dhin Dha	Dha Tin Tin Ta　Ta Dhin Dhin Dha
Tat Tat Thai　Taa..... Tat Tat 1	Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha
Tat Tat Thai　Taa..... Tat Tat　Tat Tat	Dha Tin Tin Ta　gap　Takiट　Tha　Dit　(Tha)
Thai Thai ya Thai ya Taa..... Ta　Tha	↑×2

2

Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha	Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha
Dha Tin Tin Ta　Ta Dhin Dhin Dha	Dha Tin Tin Ta　Ta Dhin Dhin Dha
Tat Tat Thai　Taa..... Tat Tat　1ss 2ss 3ss 4ss 5	Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha
Tat Tat Thai　Taa..... Tat Tat　1ss 2ss 3ss 4ss 5　Tat Tat	Dha Tin　gap　Ta Thai　Takiट　Tha　Dit　(Tha)
Thai Thai ya Thai Tat Tat　1ss 2ss 3ss 4ss 5	↑×2

3

Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha　　Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha

Dha Tin Tin Ta　　Ta Dhin Dhin Dha　　Dha Tin Tin Ta　　Ta Dhin Dhin Dha

Tat Tat Thai　Taa..... Tat　1ss 2ss 3　　Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha

Tat Tat Thai　Taa..... Tat　1ss 2ss 3　　Takadini　gap　Ta Thai　Takiट　Tha　Dit　(Tha)

Tat Tat Thai　Taa..... Tat　1ss 2ss 3　1ss 2ss 3　Gap　1ss 2ss 3　　↑×2

Tihai

Dha Dhin Dhin Dha　Dha Dhin Dhin Dha

Dha Tin Tin Ta　　Ta Dhin Dhin Dha

×3

Takadini　Ta Thai

Takiट　Tha　　**裏拍から**

Takiट　Tha　Dit Tha　　**裏拍から**

アーマド（Aamad／आमद）

これもキタキ先生の作品で、とてもいいものです。出来そうなら↑のウタン・タートに続けて行いましょう。

Taa　Thai　Tat　　Aa Thai　　Tat

Taa　Thai　Tat　　Aa Thai　　Tat

Thai　Thai　Thai　　オン

Tat　Tat　Thai　　オフ

Tat　Tat　Thai　　オン

Tata　Thai　1 2　　オフ

×3

みっつのティハイ（Tihai／तिहाई）

これは２０２４年に渡印時に習ったみっつの連続するティハイです。素晴らしいものなのでここに入れました。
これも↑のマッディヤ・ラヤに接続してよいでしょう。

1	2	3
Takiट　Dikiट　Takiट　Dikiट	Takiट　Dikiट　Takiट　Dikiट	Takiट　Dikiट　Takiट　Dikiट
12345	Taka Din　Taka Din　Taka Din	123
1234	Tha na	123
123	Tha na	12
12	Tha	12
1		1　1　1

パラン（Paran／परन）

パランはヌリッタの代表的な演目で、特徴はボルがパカワジの音を模した音節で構成されていることです。
パカワジはインドの伝統楽器で、両面を叩く太鼓です。胴が太く、タブラより低い音が鳴ります。
１は少し早めのマディヤ・ラヤでおこなう。２と３は↑のウタンやティハイと同じテンポなのでこれを織り込んでもよいでしょう。

1

Dhet　Dhet　Dhaa
Thraka　Dhet　Taa　Gege dida Kat　Tita　Gadigana　Dha ×3

2

Dhet　Dhet　Tirikit　Dhet
Ge Ge ti ta　Ge Ge ti ta
Ge Ge　Dhin Dhin Dhin
Ta la--na　Ge Ge Tak　Ge Ge Tak
Ge Ge na na　TitiKata　Gadigana　Tha-　×3

3

Dhet Taan　Dhet Taan　Daga Daga Thun Taka To-　×2
Takiट　Tikiट　Taka　Thun taka　Gadigana
Thunga lunga daga　Thun taka　Gadigana Thai ×3

サラスワティ・ヴァンダナ／Sarswati Vandana／सरस्वती वन्दना	in Dadra Tal
学問と藝術の神・サラスワティに捧げるヴァンダナです。	
ダートラ（Dadra）といタールの曲です。作曲・振付ともにビルジュ・マハラジ	
このタールは６拍子から成り、それぞれ３拍づつのふたつの均等なパートに分かれています。	
最もふつうに使われているテカ（Theka＝タールを朗誦するときのボル）は、「Dha Dhi na Dha tu na」です。	
そして、１拍目がタリ（Tali）、４拍目がカリ（Khali）になります。リズムとしてはいわゆるワルツの３拍子と同じなので簡単です。	
Ya Kundendu Tusharahara Dhavala	ジャスミンの花、月、雪や真珠の首飾りのように清らかで真っ白な御方
Ya Shubhra Vastravrita	純白の衣をまとった御方
Ya Veena Varadanda Manditakara	手にヴィーナと、恩恵を与える杖を持った御方
Ya Shveta Padmasana	純白の蓮華の上に座る御方
Ya Brahmachyuta Shankara Prabhritibhir Devaih Sada Pujita	ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァをはじめとする神々に常に崇められる御方
Sa Mam Pattu Saravatee Bhagavatee	そのような女神サラスワティよ、どうか私をお守りください
Nihshesha Jadyapaha	そして、私の無知を完全に払いのけてください
ヤー クンデンドゥ トゥシャーラ ハーラ ダヴァラー	
ヤー シュブラー ヴァストラー ヴリター	
ヤー ヴィーナー ヴァラダンダ マンディタカラー	
ヤー シュヴェータ パドマーサナー	
ヤー ブラフマーチュタ シャンカラ プラブリティビル デヴァイヒ サダー プージター	
サー マーム パートゥ サラスヴァティー バガヴァティー	
ニフシェーシャ ジャーディヤーパハー	

サラスワティーと弁才天

サラスワティーは藝術と学問の神です。デーヴァナーガリー文字のつづりは सरस्वती、アルファベットは Sarasvati または Saraswati、
カタカナだと「サラスヴァティー」または「サラスワティー」となるでしょう。どちらでもよいと思いますが、ここでは後者を取りました。

かつてインダス川の東方を流れていた同名の川が神格化されたものとされます。
だから川とともに描かれることが多いです。

川の神としては大地に肥沃をもたらす存在として富の象徴だった。
それがやがて言葉の神ヴァーチュと同一視され、やがて学問と藝術をつかさどる神となった。

ブラフマーの妻ですが、ブラフマーは自身からサラスワティーをつくったということですから、
同時に娘でもあるということになっています。

手が四本あり、一組は智慧と学問の象徴として数珠とヴェーダを持ち、
もう一組は藝術の象徴としてヴィーナという弦楽器を持っている。

ヴァンダナの詩にも出てきますが、肌が白く、また白い衣をまとっています。
左の画像には出ていませんが、蓮の花に座ります。

仏教に取り込まれて弁才天となり、日本では七福神のひとつに数えられ、弁天様の名でも親しまれています。
そうした福徳の面が強調されて、「才」でなく「財」で表記されることも多いようです。

なお「弁」は別字であった「辨」「瓣」「辯」「弁」を国語改革で「弁」に統合したものです。
「辨」は区別する、処理すること。「辯」はものを言う、道理を説くこと。
なのでもともとは「辨」または「辯」が使われていたと想像します。
実際、神社のホームページの記載では旧字のものも多いです。